

コウノトリ

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある小さな村の、いちばんはずれの家に、コウノトリの巣がありました。コウノトリのおかあさんは、巣の中で、四羽の小さなひな鳥たちのそばにすわっていました。ひな鳥たちは、小さな黒いくちばしのある頭を、巣の中からつき出していました。このひな鳥たちのくちばしは、まだ赤くなっていなかったのです。

そこからすこし離れた屋根の頂きに、コウノトリのおとうさんが、からだをまっすぐ起して、かたくなって立っていました。おとうさんは、かたほうの足を、からだの下に高く上げていました。こうして、見張りに立っているあいだは、すこしぐらい、つらい目にもあわなくては、と思ったからでした。おとうさんは、木で

ほつてあるのかと思われるほど、じつと立っていました。

「菓のそばに、見張りを立たせておくんだから、家内のやつは、ずいぶんえらそうに見えるだろうな」と、コウノトリのおとうさんは考えました。「このおれが、あれのご主人だなどは、だれも知るまいよ。きつと、ここに立っているように、言いつけられているんだと、思うだろうさ。それにしても、ずいぶんだいたんだろうが！」こうして、コウノトリのおとうさんは、なおも、片足で立ちつづけていました。

下の通りでは、大ぜいの子供たちがあそんでいました。そのうちに、コウノトリを見つけると、その中のいちばんわんぱくな子が、むかしからある、コウノトリの歌をうたいました。する

と、それにつづいて、みんなもいっしょにうたいだしました。けれども、はじめにうたった子がおぼえていただけを、みんなは、ついてうたっているのです。

コウノトリよ、コウノトリ、

とんでお帰り、おまえのうちへ

おまえのかみさん、巢の中で

四羽の子供を寝かしてる。

一番めはつるされる、

二番めはあぶられよ。

三番めは焼き殺されて、

四番めはぬすまれよ！

「ねえ、あの男の子たちが、あんなことをうたっているよ」と、コウノトリの小さな子供たちは、言いました。「ぼくたち、つるされたり、焼き殺されたりするんだってさ」

「あんなこと、気にしないでおいで」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。「聞かないでいらっしやい。なんでもないんだからね」

けれども、男の子たちは、なおもうたいつづけて、コウノトリのほうを指さしました。中にひとりだけ、ペーテルという男の子は、動物をからかうのはいけないことだと言って、仲間にはいろ

うとしませんでした。コウノトリのおかあさんは、ひな鳥たちを
なぐさめて、こう言いました。「心配しなくてもいいんだよ。ほ
ら、ごらん。おとうさんは、あんなにおちついて、じつと立って
いらっしやるじゃないの。おまけに、片足でね」

「ぼくたち、とつてもこわい！」ひな鳥たちは、こう言つて、頭
を巣のおくへひっこめました。

つぎの日も、男の子たちが、またあそびに集まってきました。
コウノトリを見ると、きのうと同じように、うたいはじめました。

一番めはつるされる、

二番めはあぶられよ！

「ぼくたち、つるされたり、焼き殺されたりするの？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「いいえ、そんなことはありませんとも！」と、おかあさんは言いました。「おまえたちは、もう、とぶことをおぼえなければいけません。おかあさんが、おけいこさせてあげますよ。そしたら、あたしたち、みんなで草原へとんでいって、カエルをたずねてやりましょう。カエルたちはね、水の中からあたしたちにおじぎをして、コアックス、コアックス！　って、うたうんですよ。それから、あたしたちはそのカエルを食べてしまうの。ほんとに、そりやあ楽しいことですよ！」

「そうして、それから？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「それから、この国じゆうにいるコウノトリが、みんな集まっても、秋の大演習がはじまるんですよ。そのときは、みんな、うまくとばなければいけませんよ。それは、とつてもだいじなことなんですからね。だってね、いいかい、とべないものは、大将さんに、くちばしでつつき殺されてしまうんですもの。だから、おけいこがはじまったら、よくおぼえるようにするんですよ」

「じゃあ、やつぱり、あの男の子たちが言ってたように、ぼくたち、殺されるんだね。ねえ、ほら、また言ってるよ」

「おかあさんの言うことを、よくお聞き！ あんな男の子たちの

言うことは、聞くんじやありません！」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。「その大演習がおわったら、あたしたちはね、いくつもいくつも山や森をこえて、ここからずっと遠くの、暖かいお国へとんでいくんです。そうやって、エジプトというお国へ、あたしたちは行くのよ。そこには、三角の形をした、石のお家うちがあるの。先がとがっていて、雲の上にまで高くつきでているのよ。このお家は、ピラミッドといってね、コウノトリなんかには、とても想像がつかないほど、古くからあるものなのよ。それから、大きな川もあるわ。その川の水があふれると、そのお国はどろ沼になってしまうの。そしたら、そのどろ沼の中を歩きまわって、カエルを食べるのよ」

「うわあ、すごい！」と、ひな鳥たちは、口をそろえて言いました。

「そうですとも。とつてもすてきよ！ 一日じゆう、食べることのほかには、なんにもしないんですもの。そっちではね、あたしたちが、そんなに楽しく暮しているのに、このお国では、木に青い葉っぱが一枚もなくなってしまうのよ。ここはほんとに寒くつてね、雲はこなごなにこおつて、白い小さなぼろきれみたいになつて、落ちてくるんですよ」おかあさんの言っているのは、雪のことだったのです。けれども、これよりうまきは、説明することができませんでした。

「じゃあ、あのいたずらっ子たちも、こなごなにこおつてしまう

の？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「いいえ、あの子たちは、こなごなにこおつて、くだけたりはしませんよ。でも、まあ、そうなったもおんなじで、みんな、暗いお部屋へやの中にひっこんで、じつと、ちぢこまっていなければならぬの。それなのに、おまえたちは、きれいなお花が咲いて、暖かいお日さまのかがやいている、よそのお国をとびまわっていることができるんですよ」

やがて、幾日か、たちました。ひな鳥たちは、もうずいぶん大きくなったので、巢の中で立ちあがつて、遠くまで見まわすことができるようになりました。コウノトリのおとうさんは、毎日毎日、おいしいカエルや、小さなヘビや、そのほか、見つけること

のできたごちそうを、かたつばしから持ってきてくれました。それから、おとうさんは、子供たちに、いろんな芸当をやってみせました。そのようすは、ほんとにゆかいでした。頭をうしろへそらせて、しっぽの上においてみせたり、小さなガラガラのように、くちばしで鳴いてみせたりするのです。それから、いろんなお話もして聞かせました。それは、ぜんぶ沼のお話でした。

「さあ、おまえたちは、とぶおけいこをしなきゃいけませんよ」と、ある日、コウノトリのおかあさんが、言いました。そこで、四羽のひな鳥たちは、屋根の頂いただきに出なければなりませんでした。まあ、なんて、よろよろ、よろめいたことでしょう！ みんなは、羽で、からだのつりあいをとっていたのですが、そうしていても、

いまにもころがり落ちそうでした。

「いいかい、おかあさんをごらん」と、おかあさんが言いました。「こんなふうには頭をあげて。足は、こんなふうにおろすですよ。一、二！ 一、二！ これができたら、世の中へ出てみさいじょうぶよ」それから、おかあさんは、いくらかとんでみせました。つづいて、子供たちもぶきつちよに、ちよつとはねあがりました。が、バタツと、たおれてしまいました。まだ、からだか重すぎたのです。

「ぼく、とぶのはいやだよ」一羽のひな鳥は、こう言つて、巢の中へはいこんでしまいました。「暖かい国へなんか、行かなくつたつていいや！」

「じやあ、おまえは、冬がきたら、ここで、ここえ死んでもいいの？ あの男の子たちがやってきて、おまえをつるして、あぶつて、焼き殺してしまってもいいの？ なら、おかあさんが、男の子たちを呼んできてあげましょう」

「いやだ、いやだ」と、そのコウノトリの子供は言つて、ほかのひな鳥たちと同じように、また、屋根の上をはねまわりました。三日めには、すこしでしたけれども、みんなは、ほんとうにとぶことができるようになりました。こうなると、もう自分たちも、空に浮ぶことができるだろう、と思いました。それで、みんなはじつと浮んでいようと思いました。すぐに、バタツと、落つこちてしまいました。ですから、また、あわてて羽を動かさなければ

なりませんでした。

そのとき、男の子たちが下の通りへ集まってきた、またうたいだしました。

「コウノトリよ、コウノトリ、とんでお帰り、おまえのうちへ！」
「ぼくたち、とびおりてって、あの子たちの目玉を、くりぬいてやっちゃいけない？」と、ひな鳥たちは言いました。

「いけません。ほうっておきなさい」と、おかあさんは言いました。「おかあさんの言うことだけ聞いていれば、いいんですよ。そのほうが、ずっとだいじなことなんですよ。一、二、三！ さあ、右へまわって！ 一、二、三！ 今度は、えんとつを左のほうへまわって！ —— ほうら、ずいぶんじょうずにできたじやな

いの。いちばんおしまい羽ばたきは、とつてもきれいに、うまくできましたよ。じゃ、あしたは、おかあさんといっしょに、沼へ行かせてあげましようね。そこへは、りっぱなコウノトリの家のひとたちが、幾人も、子供たちを連れてきているんですよ。だから、その中で、おかあさんの子が、いちばんりっぱなことを、見せてちょうだいね。からだをまつすぐ起して！　そうすりゃ、とつてもりっぱに見えて、ひとからもうやまわれるんですよ！」

「だけど、あのいたずらっ子たちに、しかえしをしてやっちゃいけないの？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「どなりたいように、どならせておきなさい。おまえたちは、雲の上まで高くとび上がって、ピラミッドのお国へとんでいくんで

しよう。そのときはね、あの男の子たちは寒くって、ぶるぶるふるえているんですよ。それに、青い葉っぱも、おいしいリングモ、なに一つないんですよ」

「でも、ぼくたち、しかえしをしてやろうね」と、子供たちは、たがいにささやきあいました。それから、またおけいこをつづけました。

通りに集まる男の子たちの中で、いつもあのわる口の歌をうたっているよくない子は、いつか、いちばんさいしょにうたいはじめた、あの男の子でした。その子は、まだほんの小さな子で、六つより上には見えませんでした。でも、コウノトリの子供たちにしてみれば、その子は自分たちのおかあさんや、おとうさんより

も、ずっとずっと大きいのですから、年は百ぐらいだろうと思っ
ていました。むりもありません。コウノトリの子供たちに、人間
の子供や、おとなの人の年が、どうしてわかるはずがありませんよ
う。

コウノトリの子供たちが、しかえしをしてやろうというのは、
この男の子にたいしてだったのです。だって、この子がいちばん
さいしよにうたいだしたのですし、それに、いつもきまって、歌
の仲間にはいつていたのですから。コウノトリの子供たちは、心
からおこっていました。そして、大きくなるにつれて、だんだん、
がまんができなくなりました。それで、とうとう、おかあさんも、
しかえしをしてもいい、と、約束しなければならなくなってしまう

いました。でも、この国をたつていく、さいごの日まで、してはいけない、と、言い聞かせたのでした。

「それよりも、今度の大演習のときに、おまえたちがどんなにやれるか、まずさきに、それを見ましようよ。もし、おまえたちがうまくできなければ、大将さんがくちばしで、おまえたちの胸をつつくんですよ。そうすりや、あの男の子たちの言ったことが、すくなくとも一つは、ほんとうになるじゃないの。さあ、どうなるかしらね」

「わかりました。見ていてよ！」と、コウノトリの子供たちは言つて、それから、ほんとうにいっしょうけんめい、おけいこをしました。こうして、毎日毎日、おけいこをしたおかげで、とう

とう、みんなは、軽がるときれいとぶことができるようになり
ました。ほんとに、楽しいことでした。

やがて、秋になりました。コウノトリたちは、このわたしたち
の国へ冬がきているあいだ、暖かい国へとんでいくために、みん
な集まってきました。それは、たいへんな演習でした！ コウノ
トリたちは、どのくらいとべるかをためすために、いくつもいく
つも、森や村の上をとばなければなりませんでした。なにしろ、
これからさき、長い長い旅をしなければならぬのですからね。
あのコウノトリの子供たちは、たいそうみごとにやってのけまし
たので、ごほうびに、「カエルとヘビ」という、優等賞をいただ
きました。それは、いちばんよい点だったのです。そして、この

いちばんよい点をもらったものは、カエルとヘビを食べてもいいことになっていました。ですから、このコウノトリの子供たちも、それを食べました。

「さあ、今度は、しかえしだ！」と、みんなは言いました。

「そうですよ！」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。「おかあさんがね、いま頭の中で考えたことは、とつてもすてきなことなんですよ。おかあさんは、ちっちゃな人間の赤ちゃんたちのいる、お池のあるところを知っているの。人間の赤ちゃんたちはね、コウノトリが行って、おとうさんやおかあさんのところへ連れて行ってあげるまで、そこに寝ているんですよ。かわいらしい、ちっちゃな赤ちゃんたちは、そういうふうには、そこに寝て

いて、大きくなってからは、もう二度と見るこののない、楽しい夢を見ているのよ。おとうさんやおかあさんは、だれでも、そういううちつちやな赤ちゃんをほしがっているし、子供たちは子供たちで、みんな、妹や弟をほしがっているんですよ。さあ、あたしたちは、みんなでそのお池へとんで行って、わる口の歌をうたわなかつた子や、コウノトリをからかつたりしなかつた子のところへ、かわいらしい赤ちゃんをひとりずつ、連れて行ってやりましょうね。みんな、いい子なんですから」

「でも、あの子には？　ほら、さいしよに歌をうたいはじめた、あのいじわるの、いたずらつ子には？」と、若いコウノトリたちは、さげびました。「あの子にはどうするの？」

「そのお池には、死んだ夢を見ている、死んだ赤ちゃんもいるのよ。だから、あの子のところへは、その死んだ赤ちゃんを連れていってやりましょう。あたしたちが死んだ弟を連れていけば、あの子は、きつと泣き出しますよ。けれど、あのいい子にはね、おまえたちも、きつと忘れてはいないでしょう、ほら、『動物をからかうのは、いけないことだ』と、言ったあの子ね、あの子のところへは、弟と妹を連れていってやりましょう。それから、あのいい子はペーテルという名前だから、おまえたちもみんな、ペーテルという名前にしてあげましょうね」

こうして、おかあさんの言ったとおりになりました。それから、コウノトリは、みんなペーテルという名前にしました。こうい

うわけで、いまでも、コウノトリは、ペーテルと呼ばれているんですよ。

青空文庫情報

底本：「マッチ売りの少女（アンデルセン童話集※）[#ローマ数字3、1-13-23]」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1981（昭和56）年5月30日21刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://w>

ww.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コウノトリ

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>